

ポスター発表：104・105会議室

ポスター掲示： 14:30-16:30 《コアタイム奇数番14:30-15:30、偶数番15:30-16:30》

ポスター番号	演題	発表者（所属）
<p><造林></p> <p>P-01</p>	<p>グイマツ雑種F1苗の成長に対する踏圧と窒素沈着の影響</p>	<p>○横山聡子（北大農学部）・菅井徹人（北大農学院）・渡部敏裕（北大農学研究院）・佐藤冬樹（北大北方生物圏フィールド科学センター）・齋藤秀之（北大農学研究院）・渋谷正人（北大農学研究院）・小池孝良（北大農学研究院）</p>
要旨	<p>高性能林業機械（重機）による踏圧と大気汚染による窒素(N)沈着がグイマツ雑種F₁の植栽苗木に与える影響を評価した。北海道大学札幌研究林において、三段階の異なる硬さとした土壌にF₁の2年生苗木を植栽した。その半数の区に最近のN沈着を模して硫酸アンモニウムを定期的に投与した。土壌の物理性や化学性の違いが、F₁苗木の初期成長にどのような影響を及ぼすのか、成長量の調査結果から議論する。</p>	
<p><造林></p> <p>P-02</p>	<p>カラマツの造林にはどのような環境と地域が好適か？</p>	<p>○津山幾太郎（森林総合研究所北海道支所）・石橋 聡（森林総合研究所北海道支所）</p>
要旨	<p>北海道の人工林は、主伐期を迎えた林分が増加している。造林経費の低コスト化や収益の最大化を考慮した、主伐後の最適な施業手法の選択を行う上で、植栽樹種ごとの造林適地を明らかにすることは重要な課題である。本研究は、北海道における人工林の主要樹種の一つであるカラマツを対象として、道内の732地点の調査データと気候や地質といった環境要因から、カラマツの造林適地の推定を試みた。</p>	
<p><造林></p> <p>P-03</p>	<p>カラマツ、グイマツ、グイマツ雑種F1における葉フェノロジーの比較</p>	<p>○福田 陽子（国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 林木育種センター 北海道育種場）・花岡 創（国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 林木育種センター 北海道育種場）</p>
要旨	<p>グイマツを母樹、カラマツを花粉親とするグイマツ雑種F₁は、成長および材質に優れ、耐鼠性が高いことから、近年需要が高まっている。本発表では、グイマツ雑種F1における雑種強勢プロセスの理解に向けて、初期成長および通直性に優れた登録品種「北のパイオニア1号」を主な材料として開葉時期および葉中クロロフィル量の季節変化における種および雑種特性を検討した結果について報告する。</p>	
<p><造林></p> <p>P-04</p>	<p>ミズナラが混交したトドマツ人工林の密度を分角順位法で推定する</p>	<p>○伊東 宏樹（森林総合研究所北海道支所）・中西 敦史（森林総合研究所北海道支所）・山岸 孝一（北海道森林管理局森林技術・支援センター）・谷村 亮（北海道森林管理局森林技術・支援センター）・藤生 浩史（北海道森林管理局森林技術・支援センター）・佐藤 勝（北海道森林管理局森林技術・支援センター）</p>
要旨	<p>遠軽町丸瀬布国有林に位置する、ミズナラが混交したトドマツ人工林において、森下(1957)の分角順位法を使用して、トドマツ、ミズナラ、その他を含む全樹種の個体密度を推定した。分角順位法は、密度推定のための間隔法のひとつである。30点の標本点を設定し、4つの分角について、標本点から3番目に近い個体までの距離を測定して、密度を推定した。これを、標準地調査により測定された値と比較・検討した。</p>	
<p><造林></p> <p>P-05</p>	<p>(予報) トドマツ苗木の由来産地と生育環境による光合成特性の違い -クロロフィル蛍光反応と成長から-</p>	<p>○菅井 徹人（北大大学院農学院）・石塚 航（道総研林試）・丸山 隼人（北大大学院農学研究員）・渡部 敏裕（北大大学院農学研究院）・小池 孝良（北大大学院農学研究院）</p>
要旨	<p>低コスト造林を背景に、植栽苗木の最適な生育環境を把握する必要がある。需要が増加しているトドマツ苗木は、従来の研究から、由来産地によって最適な生育環境が異なると予想される。そこで本研究では、水平分布が異なる4産地のトドマツ苗木を、北海道大学札幌研究林において通常光・弱光、また富栄養・貧栄養条件で栽培した。今回の発表では成長とクロロフィル蛍光反応の季節変化から環境応答の産地間差について議論する。</p>	
<p><造林></p> <p>P-06</p>	<p>採種園産トドマツ実生後代の苗畑における初期生育の母樹家系間差</p>	<p>○坂上 大翼（東京大学北海道演習林）・木村 徳志（東京大学北海道演習林）・福岡 哲（東京大学北海道演習林）</p>
要旨	<p>東京大学北海道演習林老節布トドマツ採種園にて、構成16クローン中14クローンの各1本から採種して苗畑に播種し、3年間の生育を調査した。種子の充実率に起因して家系間で発芽率に違いが見られ、見かけの充実種子重が重いほど発芽後の生残率が低い傾向にあった。暗色雪腐病被害率にも家系間で差があったが、生残率との関係はなかった。苗高と根元径は家系間で有意に差があり、根元径の違いは生育密度によるものと考えられた。</p>	